

田中正俊先生を偲んで

鶴見 尚弘

中国明清史・近代史研究の輝ける先達者であり、人生の師として敬愛申し上げていた東京大学名誉教授田中正俊先生が、二〇〇二年一月四日未明肺炎のため急逝された。享年七九才。御遺志により葬儀・告別式は一月六日に近親の方々のみで執り行われた。静謐・清冽のもとにとり行われ、生前の先生の床しい生き方を思い起すことになったとのことである。十二月八日には、生前先生と親交の厚かった方や学恩を受けた人々によって「偲ぶ会」が催された。年末の忙しい時にも拘わらず、二五〇人以上の方々が集い、先生と永遠の別れを告げた。

九月下旬の事であったであろうか。先生から電話を頂戴し、「本日病院から自宅へ戻りました。貧血がひどいですが療養すれば大丈夫です」と話されたが、いつもの張りのあるお声とは違うのが気懸りだった。一〇月の中頃、自宅へお見舞いに伺ったところ、かなり重篤のようにお見受けした。会話が進むにつれ語り口にも張りが戻り、病状についても適確に説明下さった。話題が学問の話に移ると、付

箋が各処に差し込まれた名著『戦中戦後』の改訂版を示しながら「どうしても三訂版を出さなくてはならなくなり、今手を入れている最中です」と。小一時間程で暇をしようと思いい立ち上りながら、「お仕事を少し控えられて食欲をつけて下さい」と申し上げたところ、心配をかけまいとの心遣いからであろうか「私には『戦中戦後』の改訂の仕事がありますから精神的に参ることはありません。ご安心下さい」と凜として云われ、につこりされた。一月二日の夜、御長男の正敬氏から父の病状が急変したとの報せを受け、慌しく病院に駆けつけたが、すでに応答はなくなり、ことに茫然としてしまった。ただサイドテーブルの上には、前回よりも付箋が沢山に挟まれたあの『戦中戦後』の改訂版が置かれており、意識のなくなる直前まで推敲に推敲を重ねられた先生のご意志の強靱さを知ると同時に、最後まで学問的情熱を失わず執筆を続けられた先生のお姿がはっきりと胸に刻まれた。

私は先生と出身大学を異にしていたため直接御指導を受ける事が出来たのは、大学院博士課程三年の時に大塚史学会で「初期明王朝の農民支配」という題で報告をする機会を得た時以来である。一時間程の報告に対し、ほぼ同じ時間の懇切丁寧な質問とご意見を頂戴したが殆んどともに答えることが出来ず、学問の酷しさを嫌という程知らされ

た。先生は私の落胆振りを察してか、廊下に出ると声をかけて下さり食事に誘って下さった。途中、論文としてはもう少し練り直した方が良いが、ぜひ研究ノートとして発表してはと薦めて下さった。これが機縁となつて東洋文庫の研究生に推薦して頂いた。それ以来四〇年にわたつて明代史研究室で机を並ばせて頂く光栄に浴した。先生は年齢差があり、学問的に未熟な私に対しても、常に同学の士として遇して下さりいろいろと御指導頂いた。この御恩は決して忘れることが出来ない。

先生の研究業績やご活躍の場は多岐にわたつており、浅学菲才の身にその全容を語ることは到底できない。幸い先生から直接教えを受けた方々によつて、別の機会にそれぞれの立場から追悼の文を書かれるとの事であるので、請われるまゝ、に先生の業績と思ひ出の一端を記し、生前の学恩への感謝としたい。

先生の経歴や学問については『戦中戦後』に詳しい。それによると、先生は一九二二年一月に台湾の台南市で出生れになった。小学校低学年の頃から、将来学問の道へ進みたいと考えておられた由である。一九四〇年に東京府立第九中学校（現在の東京都立北園高等学校）を卒業され、旧制の第一高等学校文科丙類に入学された。入学試験の口頭試問で将来何をしたいかと問われ、「日本と中国との懸

橋になるような仕事をしたい」と答えられたという。当時我が国は建国紀元二六〇〇年記念祝賀行事で湧き立っており、日中戦争での軍事的勝利の影響もあつて、中国に対する差別意識がさらに助長されようとしていた時であつたことから考えると、先生が上述のような意識を明確に持つておられたことは特筆すべきである。戦時下のために旧制高校は半年繰り上げとなり、四三年九月に卒業。一〇月には東京帝国大学文学部東洋史学科に入学されたが、僅か二ヶ月後に学徒動員で徴兵となつた。

先生の少年・青年期は長期にわたる戦争の時代であつた。それは「あたかも自然現象のように、全く他律的に私を制約する運命にほかならなかつた。」このような情況の中で、自らに課した生活信条は、第一に「無意識に生きる」ということは罪悪である」という戒めであり、第二に「瞬間の永遠性」という観念への認識であつたという。限られた時間を精一杯生き、自分の生命を充実させようと根づめて読書されただけに、青春時代の読書は質量ともに大変充実したものであつた。中学時代には日本・欧米の小説や詩歌、キリスト教関係の宗教書から広く教養書に及び、高等学校時代には歴史・哲学・社会科学等の書物が加えられた。それとともに、先生は少年時代から芸術とくに美術や書に特別な才能を発揮し、生涯学問とともに芸術を愛することをモツ

トとして実行された。それは読書と思索を通じて緻密な思考能力を高めるとともに、自ら書画を描き塑像を造り、秀れた作品を鑑賞することによって感性を養い精神の高揚を図ったのである。

一九四三年一月には陸軍二等兵として、敦賀の歩兵連隊に入営された。半年余り連隊砲操縦の苛酷な訓練を受けた後、航空兵に転科。四四年九月南方戦線に参加するため大阪港からマニラへ向ったが、無事到達できた輸送船は一七隻中僅かに三隻であったという。当時フィリピン戦線はすでに末期的情况にあり、上陸後食糧事情も悪く、やがて栄養失調と伝染病のためマニラ郊外のケソン陸軍病院入院されたが、殆んど歩けない状況であった。米軍の上陸が間近かに迫り病院は解散となったが、後方の病院への転送を断り自活を図った。幸いにして兵種が航空兵であったため、一二月にマニラからシンガポールへの転戦を命ぜられた。途中輸送船団は航空機や艦船の襲撃を受け、やむなく予定を変更して台湾の高雄へ緊急避難し、奇蹟的に命拾いをされたという。台湾では飛行場大隊勤務を命ぜられ敗戦を迎えた。四六年春に日本へ帰国したが体力の衰弱が著しく、一年間の体力恢復を俟って、四七年四月に東京大学文学部東洋史学科へ復学。五〇年三月に卒業された。卒業論文は湖州等の絹織物業の展開に関する、学友佐伯有一氏と

の共同研究によるものであった。この論文は、西嶋定生氏の「一六・七世紀中国農村工業に関する一連の研究を受けついで画期的な労作で、発表前から東大関係者の中で注目を集め、学術論文上で内容を予告したり引用するものもあった。五〇年四月に大学院に入学、五一年四月に東洋文庫兼任研究員、五四年四月に横浜市立大学文理学部専任講師、五五年四月に助教授を経て、六七年四月に東京大学文学部助教授に就任。まもなく文部省長期在外研究員としてケンブリッジ大学へ出張。主としてジャーディンマジンソン商会関係資料の蒐集に当った。帰国後、大学紛争が起ったが林健太郎文学部長を支えて大学構内に立て籠もり、誠意をもって学生との話し合いに応じた。七三年四月に教授に昇任。定年により信州大学文学部教授に転任。八五年四月学部長を併任。八八年定年退職となったが、同年四月に神田外语大学外国語学部教授に招聘され、九五年三月勇退。この間財団法人東洋文庫理事・図書部長等を歴任、複理事長の絶大なる信任のもとに困難な東洋文庫の運営に尽くされた。先生は敗戦後の日本社会において、国民的課題であった封建遺制を打破して民主的変革をいかにして成し遂げるかという問題意識の下に、中国の封建社会の解体過程と考えられる明清時代から近代への変革の歴史を、社会経済史的立場から解明しようとした。先生はマルクスや大塚久雄等

の理論に学ぶことによつて、歴史の實体的認識の方法や強靱な論理性を身に付けるとともに、日本・東洋・西洋の歴史や社会科学に関する開拓的・古典的研究は勿論のこと、戦後の秀れた諸説をも批判的に継承し、斬新にして独創的な見解を提示された。それらの諸見解は、戦後歴史学が達成した高度の論理水準の高みにおいて体系化しようとしたものであった。輝けるそれらの諸業績とともに、多くの示唆に富んだ問題提起は、明清および近代史研究者にとつて珠玉の如き指針であり、今日なお、われわれ研究者にとつて生きた貴重な共通の財産となつてゐる。

先生の学風は、何よりも視野の広さと豊かな教養とに支えられており、それらを基盤として科学的・実証的歴史学の樹立を目指された。それは周到な学説史の整理と卓越した高度な問題意識、厳密な方法論の下に徹底した実証的研究を行なおうとするものであった。「当該史料からどれだけの事が読みとれるか」、「より厳密な実証には歴史的分析の道具としての理論が不可欠であり、絶えず理論の深化と精密化を心懸けなければならない」、「それぞれの史料や事実との内的な相互連関性を常に追究し、静止してゐるものとしてではなく運動するものとして把握しなくてはならない」……等等、研究会の席上での歯切れの良い御指導の数々は今でも耳から離れることはない。

先生の研究上の諸業績は、大別すると以下の五つになるのではなからうか。

第一は商品生産の発展と封建社会の解体に関するものである。戦後歴史学の旗手として登場した西嶋定生氏の秀れた労作、一六・七世紀江南農村における綿織物業に関する研究に触発され、それらの研究を發展させようとした江南の絹織物業に関する一連の研究がある。西嶋氏が東洋的停滞論を克服しようとしながら結果的に停滞論に陥つてしまつた点を批判して、方法論的にも史実の面でも新見解を提示された。しかしながら、この論文の発表を暫く躊躇されたのは、大塚久雄の理論に拠つたため、生産力的側面が強調され階級闘争の側面が稀薄になつたことによる反省からと思われる。これらの研究は、第一に封建社会から資本制社会への解体過程を中国史に則して考察しようとしたものであり、第二に「資本制的生産様式は旧来の生産様式を根底から覆す」というマルクスの命題と、中国に広汎に展開する「小農業と家内工業が鞏固に結合した」小農民の存在というマルクスの指摘をいかに矛盾なく統一的に把握するかという課題でもあつた。前者に関する業績としては「明末清初江南農村手工業に関する一考察」「アジア社会停滞論批判的方法的反省」「明・清時代の問屋制前貸生産について」等があり、後者に関しては「西欧資本主義と旧中国社

会の解体」に見られるミツチエルレポートの分析に関する諸論稿や世界市場に関するもの等がある。

第二は中世史研究における国家権力と直接生産者との関係についてである。古代史研究では周知のごとく国家権力が固有な構成的要素として捉えられ、国家の権力構造の理解が主要な論点となってきた。これに対して中世史研究では専ら地主・佃戸という直接的な生産関係が問題とされ、国家権力はそれらと分離・捨象される傾向にあった。先生はこれらに関する反省から、国家権力をいかなる媒介を経て生産関係と結びつけるかという提言をなされた。これを受け、六〇年代以降国家権力に関する研究が急速に拡った。「中国の変革と封建制研究の課題」「竜骨車と農民」等の外、これらの研究は共同体や里甲制、郷紳論として各論文に散見される。

第三は農民・織工等の階級闘争に関するものである。先生の研究対象に当初から階級闘争が重要な位置を占めていたことは、最初の公表論文が農民闘争に関するものであったことから明白であるが、それらを教条的に述べるのではなく、史料に基づいて語らせる手法を取られた。「民変・抗租奴変」「鄂茂七の乱の所伝について」等がある。

第四は近代史関係の研究である。先生はかつて中国共産党による革命運動は、中国封建主義に対する闘争であると

ともに、帝国主義、とくに日本帝国主義との闘争であった。それは我々の心の痛みを覚えさせる闘いであった。このような視点が欠落しているならば、中国革命史は理解できないと近代史研究の視座を明確にされた。「中国社会の解体とアヘン戦争」「中国現代史」等がある。

第五は日本人の中国観と方法論に関するものである。大部分の国民は、真相を知らされないまま戦争は聖戦として美化され協力した、この反省から、日本人の中国との関りや中国観の変化とその歴史的背景とを明らかにするとともに、世界史像を再構成するための問題や方法、東アジア近代史への視点等に関わるものである。「アジア研究における感性と論理」「東アジア近代史への視点」等がある。

先生は、論文を書くことは志を述べることであるとの信念のもとに、思索に精神を集中し、これを言葉に形象化することに最大限の努力を払われた。先生の論稿に一片の淀みもなく、事柄の本質を厳密・適確に表現しているのは、ひたすら思索と推敲とを重ねられたからである。

これらの研究業績を振りかえってみるに、先生の学問の根底には、侵略戦争であるあの太平洋戦争になぜ参加をしなければならなかったかという悔恨と怒りが込められているように思えてならない。このことを象徴的に示しているのは、先生の御高著『中国近代経済史研究序説』や『戦中

戦後』の巻頭に前文等はなく、ただ「還らざりし友へ」との献詞のみが記されていることである。この献詞の内奥には、偶然の連鎖によって九死に一生を得て復員出来た先生にとつて、無謀な太平洋戦争の犠牲となり無念の想いを自ら語り得なかつた無数の犠牲者（侵略された側の人々を含めて）への断ち難い痛恨の思いが、生涯の課題として自らに課せられているとの自覚によるものと思われる。先生は「歴史学徒は、専門分化の研究者意識に驕り、これにあぐらをかくことなく、侵略戦争に対する真に人間的な羞恥と憤りとから出発して、さらに、戦争の歴史的原因を解明し、人類に対するその犯罪の構造を分析することを志し、各地に広がる市民運動と携えて、物理的に、抹消されようとしてつある事実を収集し、真実を求めて、その成果を世に提供する義務を持つている。」と述べられているが、文字通りそれらを実行された。

先生のお仕事はアカデミズムの中で終始したのではない。常に学問や学界の民主化を期しておられたから、学界の組織づくりや学術の刷新には中心的存在として人々の信頼を得ていた。立場上多くの学界に関係されたが、なかでも精力的に関わられたのは学界の權威とは無縁な「歴史科学協議会」であった。代表委員をはじめ三十年の長きにわたつて会の維持運営に当り学界の民主化に尽力された。研究会

や出版計画においても独自の才能を發揮された。講座等の出版を多く企画実現されたのは、一つには研究者の間で独占されている研究の成果をいち早く一般の歴史認識にまで高めたいとの気持からであり、第二には必ずしも研究条件に恵まれないまま全国に散らばつた研究者に発表の場を与え、研究者相互の交流を図りながら学術の発展を願つたからであつた。

また、先生は素晴らしい教師であつた。研究者としての重厚さとは別に、人間的には大変に親しみやすく誠実で魅力的であつた。若い研究者や学生に対してもいかなる時でも心の全てを傾注して応対された。時には無器用な質問で周囲がはらはらするような場合でも、相手への心遣いはそれを上回り丁寧な耳を傾け、要点を押え長所を育てようと努力された。学生の上原稿には丹念に目を通され、文章の一字一句まで訂正され、必ず意見を付された。先生の指導方針は学生に接する時間を少しでも多くし、学生を自由に羽ばたかせながら能力を最大限に發揮させようとするものであつた。田中ゼミからは、多くの留學生を含め幾多の有為な人材が輩出している。

先生は海外の研究者とも知己が多い。芸術や文学に関する対話を大変楽しみにして東洋文庫を度々訪ねられたナポリ東洋学校のマルチェロ・ムッチョーリ教授、中国革命に

ついて先生ほど深く理解している外国人研究者はいないと心から信頼しておられた近代史研究所の劉大年名誉所長、書家としても有名な明史学会の劉重日会長は先生の歐陽詢流の書は大変気品があると称讃され、かつマルクス文献に關する造詣の深さに讃辭を惜しまなかつた。傅衣凌・林甘泉・陳高華・唐文基・姜鎮慶・樂成顯・吳金成・金鎮鳳・全淳東・J・S・コール先生……等、思ひ出に残る方は枚挙に遑がない。

先生は常に學問と全人格的なものとの統合を目指し研鑽を怠られなかつた。先生はいつも生き生きとして筋を通さ

れた。そのお姿は城山三郎流に言えば、まさに「雄氣堂々」とした人生であつた。家庭にあつては良き夫であり、良き父親であつた。最愛の美しい奥様と、何をなさるにも一緒に緒であり、共に語り楽しみ合う時間を持たれることを至上の喜びとされた。それだけに一人旅立たれた先生のお嘆きは如何ばかりか察するに余りある。

先生に対する思慕の氣持はいくら申し上げても尽きることはない。先生の絶大なる偉業と御恩に対し心から尊敬と感謝を捧げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げたい。